

関係代名詞whoseに相当するof whichやof whomを用いた
英語表現の容認可能性とスピーチレベル

前 田 浩

新島学園短期大学紀要 43号
(別刷)

2022年3月31日発行

関係代名詞whoseに相当するof whichや of whomを用いた英語表現の 容認可能性とスピーチレベル

前 田 浩

The Acceptability and Speech Levels of English Expressions with *of Which* or *of Whom*, an Equivalent to the Possessive Relative Pronoun *Whose*

Hiroshi MAEDA

要 旨

関係代名詞を用いた英語表現にはいくつかの異形 (variant) がある場合が多い。学習者はすべての異形を学習し、それらがすべて正しい表現であることを学ぶが、どの表現が書き言葉で用いられ、どの表現が話し言葉で用いられるのかという視点が、日本の英語教育では欠落しているように思われる。本稿では、この欠落を補うべく、所有格の関係代名詞whoseに相当するof whichやof whomを用いた英語表現の容認可能性とスピーチレベルを解明する。

Abstract

There are several variants with the same meaning among expressions using relative pronouns. Students learn all the variants and are taught that all of them are correct. However, they do not learn whether they are used in speech or in writing, a perspective English language teaching in Japan lacks. To fill this gap in teaching English in Japan, this article clarifies the acceptability and speech levels of English expressions with *of which* or *of whom*, an equivalent to the possessive relative clause *whose*.

0. はじめに

関係代名詞を用いた英語表現にはいくつかの異形(variant)がある場合が多い。例えば、(1)の例を見てみよう。

- (1) a. the person whom I respect most
- b. the person who I respect most
- c. the person that I respect most
- d. the person I respect most

(1)の例では、the personは目的語から派生したと考えられるので、(1a)のように、先行詞が人物で目的格の場合に該当し、関係代名詞whomが用いられる。このような場合に、(1b)のように、本来主格の関係代名詞であるwhoが用いられることもある。また、(1c)のように、先行詞が人物で目的格の場合は、関係代名詞thatも用いられる。さらに、(1d)のように、目的格の関係代名詞は省略できる。このようなことを英語教師が学習者に教え、学習者も習うので、(1)の英語表現はすべて正しい表現であることを教師も学習者も認識している。ところが、(1)の表現のうち、どの表現が書き言葉で用いられ、どの表現が話し言葉で用いられるのかという視点が、日本の英語教育では欠落しているように思われる。前田(2021)は、英文法書の記述を参考にし、さらにインフォーマントによるアンケート調査を用いて、この欠落を補うべく、関係代名詞を用いた基本英語表現のスピーチレベルを解明した。その続編として、本稿では、関係代名詞whoseに相当するof whichやof whomを用いた英語表現の容認可能性とスピーチレベルを解明する。

1. アンケート調査

アメリカ人3人、イギリス人1人の計4人のインフォーマント¹⁾に、関係代名詞を用いた英語表現の容認可能性とスピーチレベルを判断してもらった。容認可能性は(2)の5つのレベルを設定し、適切なレベルを判断してもらった。

- (2) a. Level 5: totally acceptable (usually grammatical), very natural (容認可能)
- b. Level 4: acceptable but a bit strange, a bit unnatural or a bit awkward
(容認可能だがやや不自然)
- c. Level 3: borderline case, neither acceptable nor unacceptable (ボーダー

ライン)

d. Level 2: bad (容認不可能)

e. Level 1: totally unacceptable (usually ungrammatical) (容認不可能)

さらに、(2)の容認可能性のレベルで(2a)のLevel 5(容認可能)または(2b)のLevel 4(容認可能だがやや不自然)と判断された表現に関してのみ、スピーチレベルの調査を実施した。スピーチレベルは、①堅さ(formality)と②話し言葉・書き言葉の2つに分けて調査した。①と②は重なり合う部分がある。一般に、堅い(formal)表現は書き言葉であるからである。ただし、正式な場面での演説のように堅い話し言葉もあるので、インフォーマントには重なり合う部分があることを伝えた上で調査を実施した。堅さは(3)、話し言葉・書き言葉は(4)のそれぞれ5つのレベルを設定し、適切なレベルを判断してもらった。

(3) a. Level 5: formal (堅い)

b. Level 4: a bit formal (やや堅い)

c. Level 3: standard, neutral, neither formal nor informal (普通)

d. Level 2: a bit informal (ややくだけた)

e. Level 1: informal (くだけた)

(4) a. Level 5: written, literary, used mainly in writing (書き言葉)

b. Level 4: a bit written, tends to be used in writing (書き言葉的)

c. Level 3: standard, neutral, used both in writing and in speech (標準的)

d. Level 2: a bit spoken, tends to be used in speech (話し言葉的)

e. Level 1: spoken, colloquial, used mainly in speech (話し言葉)

以下、本稿では、(3)のレベルを「堅さレベル」、(4)のレベルを「文体レベル」と呼ぶことにする。また、(2)―(4)のレベルに言及する場合は、丸括弧内に明示した日本語を用いることにする。

2. 所有格の関係代名詞に相当する表現

(5a)、(5b)の表現の所有格の意味は、(6a)、(6b)のように、「of+名詞」という形式で表現することもできる。

(5) a. a man's name

- b. a book's title
 (6) a. the name of a man
 b. the title of a book

同様に、(7a)、(7b) の所有格の関係代名詞は、(8a)、(8b) のように、それぞれ、of whomやof whichという形式で表現することもできる。

- (7) a. whose name
 b. whose title
 (8) a. the name of whom
 b. the title of which

まず、(8) のような関係代名詞を用いた表現で注意すべきことは、関係代名詞節を生成する際、関係代名詞が先行詞の直後に移動するが、そのパターンが3通りあることである。1つ目は、the name of whomやthe name of whichという名詞句全体が移動する場合（以降「全体移動」）、2つ目は、of whomやof whichという名詞句の一部が移動する場合（以降「部分移動」）、3つ目は、whomやwhichが単独で移動する場合（以降「単独移動」）である。以下、この3つのパターンに分けて、スピーチレベルを考察する。

2. 1. 先行詞が事物で関係代名詞化された名詞句が主語から派生した表現

第1に、(9) - (13) のように、先行詞が事物で関係代名詞化された名詞句が主語から派生した表現を取り上げる。

- (9) a book the title of which has slipped my mind
 (10) a book of which the title has slipped my mind
 (11) a book which the title of has slipped my mind
 (12) a book that the title of has slipped my mind
 (13) a book the title of has slipped my mind

(9) は全体移動の場合、(10) は部分移動の場合、(11) は単独移動でwhichという関係代名詞を用いた場合、(12) は単独移動でthatという関係代名詞を用いた場合、(13) は関係代名詞を省略した場合である。

Close (1975: 52) は、関係代名詞の表を掲載し、人物以外(non-personal)に用いられる所有格の関係代名詞としてwhoseを挙げ、そこに(14)の注を付けている。

- (14) Not all writers would be happy about using *whose* when the antecedent is non-personal, while *of which* can sound formal.

(14) の記述から、先行詞が人物以外の場合、whoseを好まない書き手もいる一方、of whichも堅い響きがあることがわかる²⁾。

スピーチレベルの議論に入る前に、まず、(9) - (13) の表現の容認可能性について、インフォーマントの反応を見てみよう。インフォーマントの反応をまとめると、それぞれ (15) - (19) のようになる。

- (15) Level 5: 3, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)
(16) Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 2, Level 1: 0=2/4 (50%)
(17) Level 5: 2, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 2=2/4 (50%)
(18) Level 5: 2, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 2=2/4 (50%)
(19) Level 5: 2, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 1, Level 1: 1=2/4 (50%)

ここで見方を簡単に説明しておこう。(15) - (19) は、それぞれ、(9) - (13) の表現の容認可能性のレベルを(2)の基準で4人のインフォーマントに判断してもらった結果である。インフォーマントが当該表現を容認可能性のどのレベルにしたか、レベルごとに人数(コロン後の数字)を示したものである。等号の右側は4人のインフォーマントのうち当該表現を容認可能(容認可能性のLevel 5とLevel 4)とした人数を分数値で示し、それを後ろの丸括弧内に百分率で示したものである。この結果から、(9)の全体移動の場合の容認可能性は100%であるのに対して、(10)の部分移動の場合、(11)の単独移動でwhichを用いた場合、(12)の単独移動でthatを用いた場合、(13)の関係代名詞を省略した場合は、インフォーマントの意見が分かれ、いずれも容認可能性が50%と低い結果になった。

では、(9) - (13) の表現のスピーチレベルについて、インフォーマントの反応を見てみよう。インフォーマントの反応をまとめると、それぞれ、(20) - (24) のようになる。

- (20) a. 堅さレベル: Level 5: 2, Level 4: 1, Level 3: 1, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.25
b. 文体レベル: Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 1, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4³⁾
(21) a. 堅さレベル: Level 5: 2, Level 4: 0, Level 3: 1, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.33⁴⁾
b. 文体レベル: Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.5⁵⁾
(22) a. 堅さレベル: Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.5

- b. 文体レベル: Level 5: 1、Level 4: 0、Level 3: 0、Level 2: 0、Level 1: 0=Level 5⁶⁾
- (23) a. 堅さレベル: Level 5: 0、Level 4: 2、Level 3: 0、Level 2: 0、Level 1: 0=Level 4
 b. 文体レベル: Level 5: 0、Level 4: 0、Level 3: 0、Level 2: 2、Level 1: 0=Level 2
- (24) a. 堅さレベル: Level 5: 0、Level 4: 0、Level 3: 2、Level 2: 0、Level 1: 0=Level 3
 b. 文体レベル: Level 5: 0、Level 4: 0、Level 3: 0、Level 2: 2、Level 1: 0=Level 2

(20a) - (24a) は、それぞれ、(9) - (13) の表現の堅さレベル、(20b) - (24b) は、それぞれ、(9) - (13) の表現の文体レベルを表している。ここで見方を簡単に説明しておこう。例えば、(20a) は (9) のthe title of whichを用いた表現を容認可能 (容認可能性のLevel 5とLevel 4) としたインフォーマントが当該表現の堅さをどのレベルにしたか、レベルごとに人数を示したものである。等号の右側のLevelの後の数値は平均値を表している。文体レベルも同様である。インフォーマントの数は4人であるが、容認可能であると判断しない場合は、堅さ・文体レベルの判断を求めないので、合計が4人にならない場合もある。

インフォーマントの反応をまとめると、(9) の全体移動の表現の堅さレベルは〈やや堅い〉、文体レベルは〈書き言葉的〉であり、(10) の部分移動の表現の堅さレベルは〈やや堅い〉、文体レベルは〈書き言葉～書き言葉的〉であり、(11) のwhichの単独移動の表現の堅さレベルは〈堅い～やや堅い〉、文体レベルは〈書き言葉〉であり、(12) のthatの単独移動の表現の堅さレベルは〈やや堅い〉、文体レベルは〈話し言葉的〉であり、(13) の関係代名詞を省略した表現の堅さレベルは〈普通〉、文体レベルは〈話し言葉的〉であるという結果が得られた。

2. 2. 先行詞が事物で関係代名詞化された名詞句が目的語から派生した表現

(9) - (13) は、先行詞が事物で関係代名詞化された名詞句が主語から派生した表現だが、(25) - (29) は、目的語から派生した表現である。以下、この表現について考察する。

- (25) a book the title of which I forget
 (26) a book of which I forget the title.
 (27) a book which I forget the title of
 (28) a book that I forget the title of
 (29) a book I forget the title of

(9) - (13) と同様、(25) は全体移動の場合、(26) は部分移動の場合、(27) は単独移動でwhichという関係代名詞を用いた場合、(28) は単独移動でthatという関係

代名詞を用いた場合、(29) は関係代名詞を省略した場合である。

スピーチレベルの議論に入る前に、まず、(25) - (29) の表現の容認可能性について、インフォーマントの反応を見てみよう。インフォーマントの反応をまとめると、それぞれ、(30) - (34) のようになる。

(30) Level 5: 4, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)

(31) Level 5: 1, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 3, Level 1: 0=1/4 (25%)

(32) Level 5: 2, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 1, Level 1: 0=3/4 (75%)

(33) Level 5: 3, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)

(34) Level 5: 3, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)

この結果から、(25) の全体移動の場合、(28) の単独移動でthatを用いた場合、(29) の関係代名詞を省略した場合の容認可能性は100%と問題なく、また、(27) の単独移動でwhichを用いた場合の容認可能性も75%と比較的高かったのに対して、(26) の部分移動の場合の容認可能性は25%ときわめて低い結果になった。

では、(25) - (29) の表現のスピーチレベルについて、インフォーマントの反応を見てみよう。インフォーマントの反応は、それぞれ、(35) - (39) のようになる。

(35) a. 堅さレベル: Level 5: 3, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.75

b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 2, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4⁷⁾

(36) a. 堅さレベル: Level 5: 2, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 5⁸⁾

b. 文体レベル: Level 5: 1, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 5⁹⁾

(37) a. 堅さレベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 3, Level 2: 1, Level 1: 0=Level 2.75¹⁰⁾

b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 2, Level 2: 1, Level 1: 1=Level 2.25¹¹⁾

(38) a. 堅さレベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 3, Level 2: 0, Level 1: 1=Level 2.5

b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 2, Level 1: 1=Level 1.67¹²⁾

(39) a. 堅さレベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 2, Level 2: 1, Level 1: 1=Level 2.25

b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 1, Level 2: 2, Level 1: 1=Level 2

インフォーマントの反応をまとめると、(25)の全体移動の表現の堅さレベルは〈堅い〉、文体レベルは〈書き言葉的〉であり、(26)の部分移動の表現の堅さレベルは〈堅い〉、文体レベルは〈書き言葉〉であり、(27)のwhichの単独移動の表現の堅さレベルは〈普通〉、文体レベルは〈話し言葉的〉であり、(28)のthatの単独移動の表現の堅さレベルは〈普通～ややくだけた〉、文体レベルは〈話し言葉的〉であり、(29)の関係代名

詞を省略した表現の堅さレベルは〈ややくだけた〉、文体レベルは〈話し言葉的〉であるという結果が得られた。

2.3. 先行詞が人物で関係代名詞化された名詞句が目的語から派生した表現

では、(25) - (29) と同様の場合で先行詞が人物の場合について考察する。(40) - (45) を見てみよう。

(40) a man the name of whom I forget

(41) a man of whom I forget the name

(42) a man whom I forget the name of

(43) a man who I forget the name of

(44) a man that I forget the name of

(45) a man I forget the name of

(40) は全体移動の場合、(41) は部分移動の場合、(42) は単独移動でwhomという関係代名詞を用いた場合、(43) は単独移動でwhoという関係代名詞を用いた場合、(44) は単独移動でthatという関係代名詞を用いた場合、(45) は関係代名詞を省略した場合である。

スピーチレベルの議論に入る前に、まず、(40) - (45) の表現の容認可能性について、インフォーマントの反応を見てみよう。インフォーマントの反応をまとめると、それぞれ、(46) - (50) のようになる。

(46) Level 5: 2, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 1, Level 1: 0=3/4 (75%)

(47) Level 5: 2, Level 4: 0, Level 3: 0, Level 2: 2, Level 1: 0=2/4 (50%)

(48) Level 5: 3, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)

(49) Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=2/2 (100%)¹³⁾

(50) Level 5: 2, Level 4: 2, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)

(51) Level 5: 3, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=4/4 (100%)

この結果から、(42) - (45) の単独移動の場合は、関係代名詞の種類（省略の場合も含めて）にかかわらず、容認可能性は100%と問題なく、(40) の全体移動の場合の容認可能性も75%と比較的高かったが、(41) の部分移動の場合の容認可能性は、インフォーマントの意見が分かれ、50%と低い結果になった。

では、(40) - (45) の表現のスピーチレベルについて、インフォーマントの反応を見てみよう。インフォーマントの反応は、それぞれ (52) - (57) のようになる。

- (52) a. 堅さレベル: Level 5: 1, Level 4: 2, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.33
b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 1, Level 3: 1, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 3.5¹⁴⁾
- (53) a. 堅さレベル: Level 5: 1, Level 4: 2, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.33¹⁵⁾
b. 文体レベル: Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4.5¹⁶⁾
- (54) a. 堅さレベル: Level 5: 1, Level 4: 2, Level 3: 1, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4
b. 文体レベル: Level 5: 1, Level 4: 1, Level 3: 1, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 4¹⁷⁾
- (55) a. 堅さレベル: Level 5: 0, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 1, Level 1: 0=Level 3
b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 1, Level 3: 0, Level 2: 1, Level 1: 0=Level 3
- (56) a. 堅さレベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 2, Level 2: 2, Level 1: 0=Level 2.5
b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 1, Level 2: 3, Level 1: 0=Level 2.25
- (57) a. 堅さレベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 4, Level 2: 0, Level 1: 0=Level 3
b. 文体レベル: Level 5: 0, Level 4: 0, Level 3: 2, Level 2: 2, Level 1: 0=Level 2.5

インフォーマントの反応をまとめると、(40)の全体移動の表現の堅さレベルは〈やや堅い〉、文体レベルは〈書き言葉的～標準的〉であり、(41)の部分移動の表現の堅さレベルは〈やや堅い〉、文体レベルは〈書き言葉～書き言葉的〉であり、(42)のwhomの単独移動の表現の堅さレベルは〈やや堅い〉、文体レベルは〈書き言葉的〉であり、(43)のwhoの単独移動の表現の堅さレベルは〈普通〉、文体レベルは〈標準的〉であり、(44)のthatの単独移動の表現の堅さレベルは〈普通～ややくだけた〉、文体レベルは〈話し言葉的〉であり、(45)の関係代名詞を省略した表現の堅さレベルは〈普通〉、文体レベルは〈標準的～話し言葉的〉であるという結果が得られた。

3. 容認可能性とスピーチレベル

所有格の関係代名詞whoseに相当するof whichやof whomを用いた英語表現の容認可能性とスピーチレベルを探ってきたが、本節では、それらについてさらに考察する。

3.1. 容認可能性

ここでは容認可能性について考察する。今回調査した(9) - (13)、(25) - (29)、(40) - (45)の計16の表現で、4人のインフォーマント全員が、容認可能性のLevel 5と判断した英語表現は(58)の1例だけであった。

- (58) a book the title of which I forget (= (25))

一方、逆に、Level 5と判断したインフォーマントが1人もいないような表現もなか

った。このことから、当該の16の表現は、個々の表現によって程度の違いはあるが、どの表現も一応文法的(grammatical)だが、概して堅く不自然な事例が多いことがわかった。容認可能性が一番低く、25%だった表現は(59)であった。

(59) a book of which I forget the title (= (26))

(59) を1人のインフォーマントはLevel 5 (容認可能)としたが、他の3人はLevel 2 (容認不可能)でbadとした。

次に容認可能性が低く50%だった表現は(60)の5つの表現であった。

(60) a. a book of which the title has slipped my mind (= (10))

b. a book which the title of has slipped my mind (= (11))

c. a book that the title of has slipped my mind (= (12))

d. a book the title of has slipped my mind (= (13))

e. a man of whom I forget the name (= (41))

このことから、(59)、(60a)のような部分移動の表現と(60b) - (60e)の単独移動の表現で関係詞化された名詞句が主語から派生した表現の容認可能性が比較的低いことが明らかになった。

3.2. スピーチレベル

ここではスピーチレベルについて考察する。まず、スピーチレベルに関してわかったことをまとめると(61)のような表になる。

(61)

先行詞	関係詞	移動	派生	堅さレベル		文体レベル	
事物	which	全体	主語	4.25	やや堅い	4	書き言葉的
事物	which	部分	主語	4.33	やや堅い	4.5	書き言葉～書き言葉的
事物	which	単独	主語	4.5	堅い～やや堅い	5	書き言葉
事物	that	単独	主語	4	やや堅い	2	話し言葉的
事物	∅	単独	主語	3	普通	2	話し言葉的
事物	which	全体	目的語	4.75	堅い	4	書き言葉的
事物	which	部分	目的語	5	堅い	5	書き言葉
事物	which	単独	目的語	2.75	普通	2.25	話し言葉的
事物	that	単独	目的語	2.5	普通～ややくだけた	1.67	話し言葉的

先行詞	関係詞	移動	派生	堅さレベル		文体レベル	
				堅さ	レベル	文体	レベル
事物	∅	単独	目的語	2.25	ややだけた	2	話し言葉的
人物	whom	全体	目的語	4.33	やや堅い	3.5	書き言葉的～標準的
人物	whom	部分	目的語	4.33	やや堅い	4.5	書き言葉～書き言葉的
人物	whom	単独	目的語	4	やや堅い	4	書き言葉的
人物	who	単独	目的語	3	普通	3	標準的
人物	that	単独	目的語	2.5	普通～ややだけた	2.25	話し言葉的
人物	∅	単独	目的語	3	普通	2.5	標準的～話し言葉的

以下、(61) のデータに基づき、さまざまな場合の堅さ・文体レベルについて考察する。

3.2.1. 移動の種類による堅さ・文体レベルの相違

まず、whichとwhomに関する全体移動、部分移動、単独移動を比較してみよう。(62) - (64) は、whichに関する全体移動、部分移動、単独移動のそれぞれ2例とwhomに関する全体移動、部分移動、単独移動のそれぞれ1例の合計3例の堅さレベル、文体レベルの平均値を移動の種類ごとにまとめたものである。

(62)

関係詞	移動	派生	堅さレベル	堅さレベルの平均		文体レベル	文体レベルの平均	
which	全体	主語	4.25	4.44	やや堅い	4	3.83	書き言葉的
which		目的語	4.75			4		
whom		目的語	4.33			3.5		

(63)

関係詞	移動	派生	堅さレベル	堅さレベルの平均		文体レベル	文体レベルの平均	
which	部分	主語	4.33	4.55	堅い	4.5	4.67	書き言葉
which		目的語	5			5		
whom		目的語	4.33			4.5		

(64)

関係詞	移動	派生	堅さレベル	堅さレベルの平均		文体	文体レベルの平均	
which	単独	主語	4.5	3.75	やや堅い	5	3.75	書き言葉的
which		目的語	2.75			2.25		
whom		目的語	4			4		

(62) - (64) の結果から、堅さレベルの平均値を比較すると、全体移動が4.44 (やや堅い)、部分移動が4.55 (堅い)、単独移動が3.75 (やや堅い) で、堅さレベルの堅

い順に並べると、部分移動>全体移動>単独移動の順になり。また、文体レベルの平均値を比較すると、全体移動が3.83（やや堅い）、部分移動が4.67（書き言葉）、単独移動が3.75で、文体レベルの書き言葉から話し言葉の順に並べると、同様に、部分移動>全体移動>単独移動の順になった。

3.2.2. 派生による堅さ・文体レベルの相違

次に、関係代名詞whichを用いた単独移動の表現で、関係詞化された名詞句が主語から派生した表現と目的語から派生した表現を比較してみよう。その結果をまとめたものが(65)である。

(65)

関係詞	移動	派生	堅さレベル		文体レベル	
			堅さ	堅さレベル	文体	文体レベル
which	単独	主語	4.5	堅い～やや堅い	5	書き言葉
which	単独	目的語	2.75	普通	2.25	話し言学的

(65) から、主語から派生した表現の堅さレベルは4.5（堅い～やや堅い）で、文体レベルは5（書き言葉）であるのに対して、目的語から派生した表現の堅さレベルは2.75（普通）で、文体レベルは2.25（話し言学的）で、大きな相違があることが判明した。堅さレベルの堅い方から並べると、主語派生>目的語派生の順になった。また、文体レベルの書き言葉から話し言葉の順に並べると、同様に、主語派生>目的語派生の順になった。

3.2.3. 先行詞の種類による堅さ・文体レベルの相違

関係代名詞の種類による影響を排除するため、事物にも人物にも共通に用いられるthatを用いた表現と関係代名詞が省略された表現を用いて先行詞が事物である場合と先行詞が人物である場合を比較してみよう。その結果をまとめたものが(66)である。

(66)

先行詞	関係詞	派生	堅さ	堅さレベルの平均		文体	文体レベルの平均	
				堅さ	堅さレベル		文体	文体レベル
事物	that	目的語	2.5	2.38	ややくだけた	1.67	1.84	話し言学的
	∅	目的語	2.25					
人物	that	目的語	2.5	2.75	普通	2.25	2.38	話し言学的
	∅	目的語	3					

(66) から、堅さレベルの平均は、先行詞が事物の場合、2.38（ややくだけた）、先行詞が人物の場合2.75（普通）に、また、文体レベルの平均は、前者の場合、1.84（話し言学的）、後者の場合、2.38（話し言学的）になった。堅さレベルの堅い方から並べると、人物>事物の順に、また、文体レベルの書き言葉から話し言葉の順に並べる

と、同様に、人物>事物の順になった。ただし、数値の違いは小さくなく、先行詞が事物であるか人物であるかの相違は堅さレベルや文体レベルにあまり大きな影響を与えないという結果が得られた。

3.2.4. 関係代名詞の種類による堅さ・文体レベルの相違

最後に、関係代名詞の種類による堅さレベルと文体レベルの相違について考察する。他の影響を排除するため、単独移動に関して結果をまとめたものが(67)である。

(67)	先行詞	関係詞	派生	堅さレベル	堅さレベルの平均	文体レベル	文体レベルの平均		
	事物	which	目的語	2.75	3.63	やや堅い	2.25	3.63	書き言葉的
	事物	which	主語	4.5					
	人物	whom	目的語	4	4	やや堅い	4	4	書き言葉的
	人物	who	目的語	3	3	普通	3	3	標準的
	事物	that	主語	4	3	普通	2	1.97	話し言葉的
	事物	that	目的語	2.5			1.67		
	人物	that	目的語	2.5			2.25		
	事物	∅	主語	3	2.75	普通	2	2.17	話し言葉的
	事物	∅	目的語	2.25			2		
	人物	∅	目的語	3			2.5		

(67)の結果から、堅さレベルは、whichが3.63(やや堅い)、whomが4(やや堅い)、whoが3(普通)、thatが3(普通)、∅(省略)が2.75(普通)で、文体レベルは、whichが3.63(書き言葉的)、whomが4(書き言葉的)、whoが3(標準的)、thatが1.97(話し言葉的)、∅が2.17(話し言葉的)であった。このことから、堅さレベルの堅い方から並べると、whom>which>who、that>∅の順になった。また、文体レベルの書き言葉から話し言葉の順に並べると、whom>which>who>∅>thatの順になった。

この結果を、前田(2021: 35)の英語基本表現のスピーチレベルと比較してみよう。必要な部分だけ表から引用すると、(68)のようになる。

(68)	関係代名詞	堅さレベル		文体レベル	
	who	3.375	普通	3.125	標準的
	whom	4.75	堅い	5	書き言葉
	that	2.938	普通	2.625	標準的
	which	3.75	やや堅い	3.875	書き言葉的
	∅	2.5	普通～ややくだけた	2.625	標準的

(68) の結果、関係代名詞を、堅い順に並べると、whom>which>who>that>〇の順になり、似た結果だが、書き言葉から話し言葉の順に並べると、whom>which>who>that、〇の順になった。これを本稿で得られた結果と比較すると、堅さレベルについて、本稿ではwho=thatだが、前田(2021)ではwho>thatであった。また、文体レベルについて、本稿では〇>thatだが、前田では〇=thatであった。このような微妙な違いが見られたが、その他の点では同じ結果が見られた。堅さレベルと文体レベルにかなりの相関関係があることを考慮すると、堅さレベルも、文体レベルも、whom>which>who>that>〇の順になるという結論に至る。

4. まとめ

本稿では、インフォーマントによるアンケート調査を用いて、所有格の関係代名詞 whoseに相当するof whichやof whomを用いた英語表現の容認可能性とスピーチレベルについて考察した。その結果をまとめると、容認可能性に関しては(69)、スピーチレベルに関しては(70) - (73) のようになる。

- (69) 部分移動の表現と単独移動の表現で関係詞化された名詞句が主語に由来する表現の容認可能性が比較的低い。
- (70) 移動別に比較すると、堅さレベルは、堅い順に並べると、部分移動〈堅い〉>全体移動〈やや堅い〉>単独移動〈やや堅い〉の順になり、また、文体レベルは、書き言葉から話し言葉の順に並べると、部分移動〈書き言葉〉>全体移動〈書き言葉的〉>単独移動〈書き言葉的〉の順になった。
- (71) 派生別に比較すると、堅さレベルは、堅い順に並べると、主語派生〈堅い～やや堅い〉>目的語派生〈普通〉で、文体レベルは、書き言葉から話し言葉の順に並べると、主語派生〈書き言葉〉>目的語派生〈話し言葉的〉の順になり、スピーチレベルに大きな違いが見られた。
- (72) 先行詞別に比較すると、堅さレベルは、堅い順に並べると、人物〈普通〉>事物〈ややくだけた〉で、文体レベルは、書き言葉から話し言葉の順に並べると、人物〈話し言葉的〉>事物〈話し言葉的〉の順になったが、数値の違いは大きくなく、先行詞の違いはスピーチレベルにあまり大きな影響を与えない。
- (73) 関係代名詞の種類別に比較すると、堅さレベルは、堅い順に並べると、whom〈堅い～やや堅い〉>which〈やや堅い〉>who〈普通〉>that〈普通〉>〇〈普通～ややくだけた〉の順になり、また、同様に、文体レベルも、書

き言葉から話し言葉の順に並べると、whom〈書き言葉～書き言葉的〉> which〈書き言葉的〉> who〈標準的〉> that〈標準的～話し言葉的〉> 〇〈標準的～話し言葉〉の順になった。

最後に、本稿の課題について触れておくことにする。①先行詞が人物か事物かはスピーチレベルに大きな影響を与えないという結論が得られたが、それを裏付ける意味で主語由来の表現のインフォーマント調査をすべきであった。②容認可能と判断したインフォーマントが少なく、1、2人になった場合は、その調査結果の妥当性に多少の疑義が生じる。この2点が挙げられる。

注

- 1) アメリカ人インフォーマントとして、Richard Maher氏(新島学園短期大学准教授)、Heather Sunaoka氏(新島学園短期大学非常勤講師)、Keith Ichinaga氏(新島学園中学・高等学校)、イギリス人インフォーマントとして、Daniel James Hebert氏(高崎市立並榎中学校)に協力を頂いた。補足調査に関しては、アメリカ人インフォーマントとしてRichard Maher氏、イギリス人インフォーマントとして、Steven Hampton氏(新島学園中学・高等学校)に協力を頂いた。
- 2) Close (1975: 53) は、くだけた文体では、ia) のような of which は避け、ib) のように表現すると述べている。
 - i) a. He mentioned a book the title of which I can't remember now.
 - b. He mentioned a book – I can't remember the title of it now.
- 3) (9) を容認可能としたインフォーマント4人のうち1人が文体レベルの判断を保留したため、3人の判断になっている。判断を保留した理由について、slipped my mindがややくだけた表現であり、Eメールならよいが論文では用いないので、whichの堅い文法と組み合わせると奇妙に(strange)響くからだとコメントした。このコメントからwhichの部分に関しては書き言葉であると判断される。例文の作成に関してslipped my mindではない別の標準的な表現を用いるべきであったと判断される。
- 4) (10) を容認可能としたインフォーマントは2人だったが、容認不可能としたインフォーマント1人が堅さレベルの記入をしたため、3人の判断になっている。
- 5) (10) を容認可能としたインフォーマントは2人だったが、そのうち1人が文体レベルの判断を保留(理由は上記3)と同じ)し、逆に、容認不可能としたインフォーマント1人が堅さレベルの記入をしたため、2人の判断になっている。
- 6) (11) を容認可能としたインフォーマント2人のうち1人が文体レベルの判断を保留(理由は上記3)と同じ)したため、1人の判断になっている。
- 7) (25) を容認可能としたインフォーマント4人のうち1人は文体レベルを記入せず、もう1人は文体レベルの判断を保留したため、2人の判断になっている。判断を保留した理由について、forgetがくだけた語であり、書き言葉では用いないので、of whomの堅い文法と組

- み合わせると奇妙に (strange) 響くからだとコメントした。このコメントから of whom の部分に関しては書き言葉であると判断される。例文の作成に関して forget ではない別の標準的な語を用いるべきであったと判断される。
- 8) (26) を容認可能としたインフォーマントは1人だったが、容認不可能としたインフォーマント1人が堅さレベルの記入をしたため、2人の判断になっている。
 - 9) (26) を容認可能としたインフォーマントは1人だったが、そのインフォーマントが文体レベルの判断を保留（理由は上記7）と同じ）し、逆に、容認不可能としたインフォーマント1人が文体レベルの記入をしたため、1人の判断になっている。
 - 10) (27) を容認可能としたインフォーマントは3人だったが、容認不可能としたインフォーマント1人が堅さレベルの記入をしたため、4人の判断になっている。
 - 11) (27) を容認可能としたインフォーマントは3人だったが、容認不可能としたインフォーマント1人が文体レベルの記入をしたため、4人の判断になっている。
 - 12) (28)を容認可能としたインフォーマント4人のうち1人が文体レベルを記入しなかったため、3人の判断になっている。
 - 13) (43) の調査は、補足調査で加えたものである。そのため、十分な数のインフォーマントが得られず、アメリカ人インフォーマント1人、イギリス人インフォーマント1人の計2人の判断になっている。
 - 14) (40) を容認可能としたインフォーマント3人のうち1人が堅さレベルの判断を保留したため、2人の判断になっている。判断を保留した理由について、forgetがくだけた語であり、書き言葉では用いないので、whomの堅い文法と組み合わせると奇妙に(strange)響くからだとコメントした。このコメントからwhomの部分に関しては書き言葉であると判断される。例文の作成に関してforgetではない別の標準的な語を用いるべきであったと判断される。
 - 15) (41) を容認可能としたインフォーマントは2人だったが、容認不可能としたインフォーマント1人が堅さレベルの記入をしたため、3人の判断になっている。
 - 16) (41)を容認可能としたインフォーマントは2人だったが、1人が文体レベルの判断を保留（理由は上記14）と同じ）し、逆に、容認不可能としたインフォーマント1人が文体レベルの記入をしたため、2人の判断になっている。
 - 17) (42) を容認可能としたインフォーマントは4人だったが、容認可能としたインフォーマント1人が文体レベルの判断を保留（理由は上記14）と同じ）したため、3人の判断になっている。

引用文献

- Close, R. A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. Essex: Longman.
- 前田 浩 (2021)「関係代名詞を用いた基本英語表現のスピーチレベル」『大塚フォーラム』第 39 号、pp. 25-36. 大塚英語教育研究会.